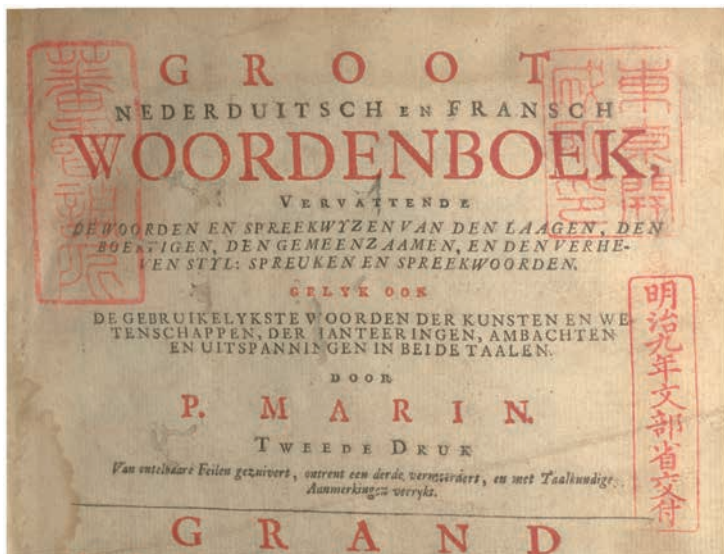


江戸幕府等旧蔵蘭書印譜選

当館所蔵の江戸幕府等旧蔵蘭書には蔵書印、検閲印等が多々見られる。以下、その中から紹介する。() 内数字は蔵書印等のサイズ(縦×横、単位mm)。印は原寸大。各書の書誌事項は本誌掲載『蘭書』発見記補遺 文末に記載。

I. 所蔵機関の変遷例



- 1 マーリン『蘭仏辞書』上
標題紙(250×195)



- 2 楓山廻(貼紙)(141×31)
もみじやまわり

『蘭仏辞書』は2巻ものの辞書で、1は上巻の標題紙。2は下巻見返し遊びの貼紙で「楓山廻」の書入れがある。徳川家楓山文庫から新設の蕃書調所(1の左上。印は3参照)に「廻された」の意。後、明治に東京開成所(1の右上。印は35参照)所管となる。上、下巻それぞれに「求己文庫」印(16参照)もある。

II. 江戸時代 (1) 蔵書印 (幕府設置機関)



3 蕃書調所 (62×30)



4 洋書調所 (63×31)



5 開成所 (62×31)



6 講武所文庫 (75×20)



7 陸軍所 (63×25)



8 精得館 (75×20)

3～8はペリー来航を機に幕府が設置した学問所。洋学所は、蕃書調所 (1856-) →洋書調所 (1862-) →開成所 (1863-1869)、軍関係では講武所文庫 (1856-) →陸軍所 (1866-1868)と変遷した。8の精得館 (1865-1868)は長崎養生所 (日本最初の洋式病院・医学校)の後身。

II - (2) 蔵書印（藩設置機関）



9 開成館訳局（38 × 26）



10 福山誠之館印（52 × 53）



11 福山文庫（67 × 69）

幕府だけでなく諸藩も洋学摂取に努めた。9は高知藩、10、11は備後・福山藩が設けた学問所の蔵書印。

II - (3) 蔵書印等 (個人)



12 josiwo (8×19)



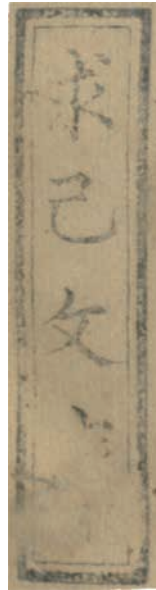
13 JOsiwo (3~6×19)



14 高島藏書
(48×47)



15 杉田立卿書入れ (257×80)



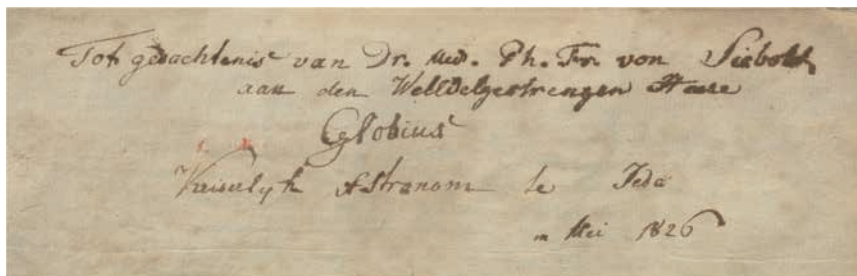
16 求己文庫 (76×18)



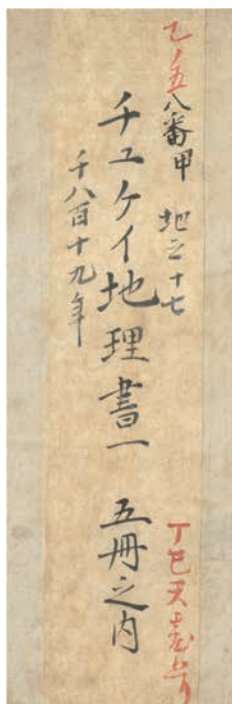
17 求己堂記
(18×17)

幕府旧蔵蘭書には、藩主・蘭学者寄贈本、個人没収本が含まれる。12、13のjosiwo、JOsiwoは「吉雄」印。吉雄家は吉雄耕牛（よしお こうぎゅう 1724-1800）を始め、多くの通詞、学者を輩出した。14は砲術家として名高い高島秋帆（たかしま しゅうはん 1798-1866）の印。15の書入れは蘭学者・杉田立卿（すぎたりゅうけい 1786-1845）寄贈を示す。立卿はショメルの『日用百科事典』の翻訳（口絵26、27参照）に従事した。16、17及び次ページ20、21は高橋景保（たかはし かげやす 1785-1829）の印。高橋はシーボルト事件に関与し、投獄された。

II - (4) 高橋景保とシーボルト



18 高橋景保宛てシーボルトの献辞 (80×220)



19 丁巳天臺廻り (貼紙) (220×45)



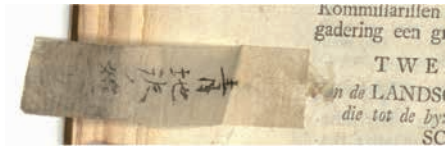
20 (上) 高橋藏書 (29×29)
21 (下) TAKAHASHI (19×19)

18はシーボルトによる高橋景保宛チュケイ『地理書』贈呈の献辞。概略、「医学博士シーボルトより、敬愛する王室天文台グロビウス君へ、記念として贈る。1826年5月」と記される。グロビウスとは景保の蘭名。同書はシーボルト事件後、幕府に没収され幕府天文方の蔵書となり(19)、蕃書調所開設に伴い同所に移管された。

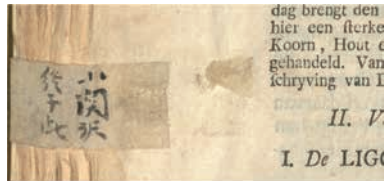
II - (5) 翻訳の痕跡



22 付箋：阮甫訳シハシメ (15×52)

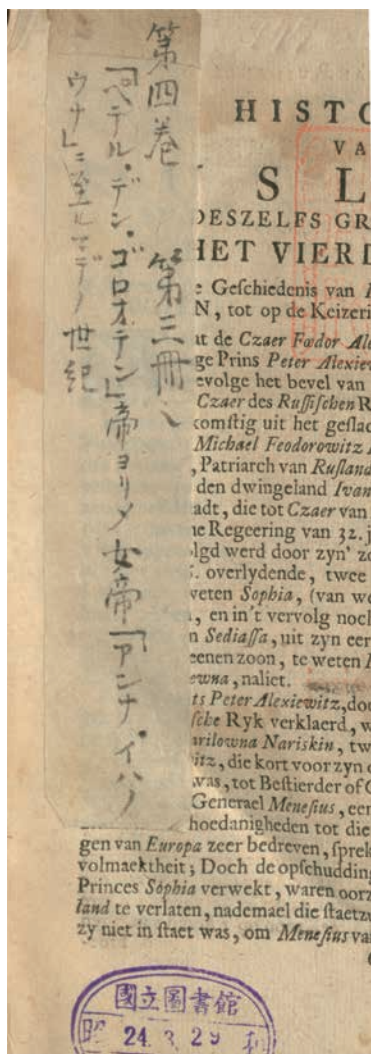


23 付箋：青地訳ノ始マリ (15×55～57)



24 付箋：小関訳ここにおわる終于此 (15×32)

江戸時代に多数の蘭書が翻訳されたが、その痕跡が残る書がある。22～24はヒュブネル『ゼオグラヒー』に付された箋。22は箕作阮甫（みつくりげんぼ 1799-1863）、23は青地林宗（あおちりんそう 1775-1833）、24は小関三英（こせきさんえい 1787-1839）で、各蘭学者の翻訳担当箇所を示す。



25 貼紙 (161×51)



26 付箋 : 了 (24×12~13)



27 貼紙

25は『リュスランド』添付の貼紙。地理学者山村昌永（やまむらまさなが 通称才助 1770-1807）自筆とされる。昌永は幕命により『魯西亜国志』を著した。26、27はショメル『日用百科事典』第1巻から。同書は、文化8（1811）～弘化3（1846）年、幕府最大の翻訳事業として蕃所和解御用（馬場貞由（ばばていゆう）、大槻玄沢（おおつきげんたく）、宇田川玄真（うだがわげんしん）ら）により進められた。『厚生新編』がその成果。付箋・貼紙は翻訳のため各項見出しに付されたもの。

II - (6) 検閲印



28 長崎東衛官許 (37 × 23)



29 神奈川會所改 (60 × 35)



30 安政丙辰 (29 × 29)



31 安政丁巳
(26 × 9)



34 長崎官事点檢之印 (44 × 44)



32 安政庚申
(13 × 8)



33 文久辛酉
(23 × 8)

大半の蘭書に幕府輸入検閲印が押されている。長崎奉行所による「長崎東衛官許」印が代表的。同印に加え「和暦年号」押印の蘭書も多い。また「和暦年号」のみ押印の検閲済み蘭書も少なくない。なお、34の「長崎官事点檢之印」は長崎で和刻の蘭書のみに見受けられることから、長崎奉行所の出版検閲印と推測される。

Ⅲ. 明治時代—蘭書繼承機関



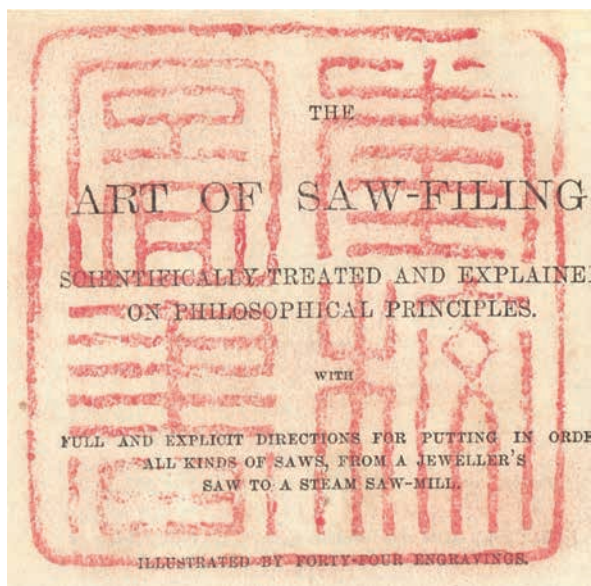
35 東京開成所印
(44 × 32)



36 大學南校 (70 × 71)

35～37は開成所の後身（東京大学の前身）の蔵書印。38は開成所の理化学部門を大阪に移転し、翌明治2（1869）年開局した機関の印。同局はその翌年、理学校（39）と改称。

40の陸軍文庫は測量地図、兵史等の資料収集を目的とした陸軍省機関。41の沼津兵学校は駿河（静岡）藩が明治元（1868）年に設立した。



37 南校圖書 (71 × 70)



38 密舍局 (42 × 28)



39 理學校印 (60 × 62)



40 陸軍文庫 (33 × 33)



41 沼津學校 (沼津兵學校)
(39 × 19)